

—明治期から大正初期を中心に—

研究動機について

日本における装身具の歴史は、世界の中でも特異である。縄文時代から古墳時代までは、素材の限定はあるものの、他国の装身具とほとんど変わらないものがあった。腕輪、耳飾り、ペンダント、アンクレット、そして数少ないが指輪などが出土する。ところが奈良時代になると、装身具は忽然と姿を消し、以後、江戸時代末期までの約1300年間に渡り、首飾り、指輪、耳飾り、ブローチなどは存在しない。わずかに頭髮の装身具と宗教儀式用のみが存在する。これほどまでに装身具を使わなかった民族は世界では日本以外に無く、その理由は謎である。再び着用されるようになったのは、幕末の大政奉還とともに西欧化が始まり、和服から洋服へと着替えた明治期からである。

この頃からわずか百年後の1970年代には、日本は世界で2番目の宝飾品消費国になり、女性一人当たりの消費額では、世界一となった。現在、成人女性の指輪保有数は、平均13.3個である。日本人の装身具では最も指輪が多く、西欧諸国では首飾り、腕輪、耳飾りなどが多い。日本では何故指輪だけが好まれるのかに疑問を持ち、指輪の普及時期とその要因を探究する。

これまでの先行研究は、宝石学や金工・装身具史の観点からであり、視点が作り手や売り手側からのものである。享受者の指輪に対する心情に触れたものは文献として報告されていない。先行研究者である草野千秋は「指輪の流行」において、明治期の指輪のデザインの変化は着用者の要求によると論じる。しかし、指輪の普及の要因と享受者の心情を論じるには至らない。露木宏は、明治期には和装に着用する指輪が普及したと述べるが、着用者や当時の流行についての論究はなされていない。浜本隆志は『指輪の文化史』において、明治期の指輪の発展は海外の影響によると述べる。海外の風習を取り入れた結婚指輪の普及があった点を記載するが、具体的な資料提示はない。3者ともに、「明治期には西洋文化の影響を受けて日本の指輪は普及した」とする点は共通である。しかし着用者の指輪に関する感情や社会背景などを考察する文献は存在しない。本稿では、装身具が急速に普及した明治期を中心に、指輪をめぐる歴史や社会的状況を確認した上で、当時の着用者の感情に触れ、指輪の発展の要因を明らかにする。

#### 明治期に指輪が発展した要因

明治政府の施策により指輪を製作した金工作家や工房の活躍がある。また、専門業者や百貨店が海外の指輪着用慣習を取り入れ、日本全国に宣伝し、指輪の流行を起こした。そのような社会を背景にして、珍しく美しいものに憧れ享受した女の心情があったと考える。本研究では、先行研究にはない享受者の物欲を中心に論じる。

研究対象の場所は、当時の文化の中心である東京とする。時期は明治初期から大正前期に焦点を合わせた。

### 日本の指輪着用の過程

絵画・美人画・ポスターなどの画像資料と小説・文献・広告などの文字資料に分けて調査する。

明治期に指輪が急速に受容された社会的状況を探る。金工作家・工房および専門店や百貨店などが台頭した要因を明らかにするものである。

時代背景を同じくする小説の文章に於ける女性の心理描写や、広告が意図した購買心理を考察し、指輪の普及との関係性を明らかにする。

調査は文献を中心に行い、当時の新聞、雑誌、広告その他の資料から素材や細工、デザインの変化を調査し、また、絵画資料や同時代の小説により人々の指輪に対する心情を探った。

#### 1 絵画・美人画・ポスターにおける指輪装着場面

#### 2 指輪の広告

#### 3 図像からわかる指輪のデザインと素材

#### 4 文献・小説・広告における指輪

文献は、明治11年刊『明治事物起源』、26年刊『東京百事流行案内』、32年刊『東京風俗志』などにより当時の様相を調べる。

『明治事物起源』の中の「指輪の始まり」では

[文久三年版彦蔵漂流記中に、米国人の風俗を記し、男の懐中より指環を出して女の無名指にさす]云々とあり、明治6年3月『雑誌』81号に、府下当時見聞の儘として挙げたる風俗中に、[金銀の指環を掛ける者多し]とあり。7年10月[繁盛記]蕃物舗の條に、[頭蒙ニ凸帽一、指貫ニ金環一……講ニ金環一少年、買ニ香水一懶儉]とあり、素材は金・銀が多かった。同『明治事物起源』の「馬鹿の番付」には

[洋銀の指環をはめてうれしがってをる人]を挙げおけり。明治10年頃までは、青金若しくは銀金めっきに、家の紋など彫刻したるを、矢取女や麦湯の姐さんが穿ち居たる止り、(略) 第一回内国勸業博覧會ありしより、粧飾界も西洋崇拜の度を高め、

西洋風の廉物の模造となり、せ寶石入の指輪盛んに行はれ、明治20年頃まで続きしが、今31年ころとなりては、紳士と呼ばれ貴女と唱へらるゝ人の指には、金光燦然たるこの物を見ざるはまれなるに至れり。

と記載される。

明治10年頃の接客婦達は、銀や金メッキの指輪や家紋入り指輪を嵌め、模造品や偽宝石を嵌める現象が続いたようである。

『東京風俗志』には

基督教徒の結婚の如き爬、その式簡潔にして、会堂に於いて行ひ、婿は右に、姫は左に立ち、牧師その間にありて、まづ夫婦たるの本旨を説き聴かせ、互ひに手を執らし偕老の誓をなさしめ、婿の指環を姫に授け、神にその靈護を祈りなどす。

と結婚の儀式が記載される。

#### 5 指輪に対する一般人の感情を小説から

明治24年、清水紫琴『こわれ指環』では「朝夕これを眺めまして決意を新たにした。」と自らが壊した指輪を嵌め続け、女の自立と尊厳を描く。

明治25年、樋口一葉の文的処女作『闇桜』では、千代が良之助に形見の指輪を贈る場面が描かれる。

今朝見舞いひしとき瘦せてゆるびし指輪ぬき取りて、これ形見とも見給はゞ、嬉とて心細げに打ち笑みたるその心、今少し早く知らばかくまでには衰へさせじを」と我罪恐ろしく打ち守れが、「良さん、今朝の指輪はめて下さいましたか」と云ふ声の細さよ。答へは胸にせまりて口にのぼらず、無言にさし出す左の手を引き寄せて、じつとばかり眺めしが、「妾と申して下さい」と云ひもあへず、ほろほろとこぼす涙そのまゝ枕に俯伏しぬ。

肌身につけた指輪を形見として恋人に贈る主人公の心情を『闇桜』で描いた。

明治30年、尾崎紅葉の『金色夜叉』が読売新聞に連載される。「いまでかつて見ざりし大きな金剛石を飾れる」と、黄金の指環をはめた人物を登場させた小説によってダイヤモンドの指輪は一般人への注目が高まる。(省略)

明治38年の内田魯庵『指輪』は、題名からも当時の人々の指輪に対する関心の高さを感ぜさせる。主人公お米は

指環は此頃の女の命。どれほど立派な扮装をしたからって、指環が無ければ、何の、衣服は死んだもの。女の美貌が照り輝くは指環一つ。金の延べは田舎臭く、彫刻のあるのは野暮臭く、廉ッばい宝石は品格悪し如何にしても金剛石、金剛石、金剛石！お米は、「銀や金細工の指輪は野暮ったい、指輪はダイヤモンドでないと意味はない」

とダイヤモンドに執着する。滑稽ではあるが、当時の女性たちの中には、お米のような女性が多くいたようである。

## 6 海外からの影響により変化する指輪

### ① 結婚指輪の普及

明治39年発刊の「日本家庭百科事典」に「本邦にても此の風ようやく行われ、あるいは結納後に与うるものあり」とある。約300年前の『ローマ典礼儀式書』によると[「結婚指輪は今後、左手にはめるべし」と定められる]とあり、その影響により、日本でも左手の薬指に結婚指輪を嵌める習慣は現在も残る。

### ② 婚約指輪

明治36年5月、高島屋発行の「新衣裳」の記事「豪州土産」によると

豪州には許嫁のしるしとして指輪を贈る事が通例の様です。貰ふた女は左手の第三指に指輪を嵌める。男が金持ちならば「ダイヤモンド」の指輪だそうで普通ならば生まれた月により定められた宝石を用ゆるさうです。略

指輪は「真実の保証」なりと何人（なにびと）も考えておりその訳は円満無窮、永久永存、永遠無終などの意を示し常盤の松の幾千代かけて変わらじ易はずとの意を明らかにしておりますからです。

### ③ その他の指輪装着習慣

大正元年、アメリカの業者によって定められた誕生石は、翌年、三越百貨店が「12ヶ月の指輪」として発売する。12ヶ月の指輪は、着用者の誕生月にあたる宝石を常時愛用する方法と、同一人が、その月に相当する宝石を月毎に順次取り替えて着用する2つの方法が普及する。大正3年には「花言葉指環」が発売され、指輪装着場面は拡張する。

## 7 おわりに

日本の指輪着用を画像や文書資料から調べる事により、明治10年代から40年代までの僅かな間に、指輪の素材や享受者の様々な変遷過程がわかった。

宝石が産出しない日本では、従来装身具には宝石は使われず、直接身につける装身具は存在しなかったが、海外からの影響を受け、輸入品の素材も増え、海外の風習を取り入れ指輪着用習慣が出来あがった。

指輪のデザインも、海外の博覧会出展により、外国のデザインの模倣から、日本人の体型にあう繊細なものに変化していった。

社会的状況により指輪が普及した要因は、日本の金工作家の優れた技術とそれを生かし次々と製品を作りだした工房の活躍も見られた。また専門店や百貨店の台頭も目覚ましく、次々と商品を開発し、PR誌やポスター・広告などのメディアを生かし、商品開発をして需要の創造を起こした事が明らかになった。

見たこともない宝石指輪を、様々な広告媒体により頻繁に紹介・宣伝された一般人は、多くの情報を知ることとなる。西洋への憧れと流行に遅れまいとする一般人の心情は煽られ、宝石指輪は羨望の対象となり、所有欲に駆られた享受者の心理を明らかにした。上流階級の洋装化からスタートした日本の装身具の中で、指輪は最も小さくて扱いやすく、和服にも着用できる理由で、明治期の人々は指輪を受容し、瞬く間に普及した。日本人は、指輪によって装身具を直接身につける喜びを知ったのである。

販売業者は販売チャンネルを増やし、次々と着用習慣を作り出し、美しい宝石に魅せられた享受者は増え続け、日本は世界第2位の宝石消費国となる。

本研究により、日本の指輪が急速に需要された要因は、明治政府の施策のもとに、金工作・広告・専門店の台頭によるもの、ということが明らかになった。そして、美しく珍しい物を享受したい女達の好奇心・物欲があったことは、忘れてはならない大きな要因と考察される。

## ゲオルク・ジンメル「流行の哲学」(1858～1918) ドイツ出身の哲学者・社会学者

抽象的な理論ではなく、鮮明な人間心理の分析と社会のダイナミズムの記述書

### ① 人はなぜ流行を追いかけるか

人は誰でも一般化の衝動と個性化の衝動がある。「皆と同じでありたい」という気持ちと「自分だけ特別で目立ちたい」という気持ちという矛盾の欲望を流行は満たしてくれる。

### ② 流行は誰でも手にできるか

流行の本質は、1部の人間だけがそれを手にしているが、皆がそれに向かっている。しかし、皆の手に渡ると流行ではなくなる。流行はあつてないものである。

### ③ 流行がいつも新しく無ければならないのはどうしてか

どれだけ続くかについても、流行は矛盾している。今まさに存在しているのが流行であり、同時に、すぐ過ぎてしまうのも流行である。

### ④ 流行がとかく軽薄で表面的な減少と受け取られるのは何故か

流行といえば、服装などの外面的な部分と関係がある。目に立ちたいが、孤立してはならないのが流行である、これは「社会的欲望」の産物である。

### ⑤ 流行はいったい誰のものであるか

社会の上層と下層とは、保守的である。上層は変わることを恐れ、下層はなかなか変わることが出来ない。それに対して中流は、上層と下層との間に逢って、せかせかとお互いの「違い」を強調しなければならない。しかし大した差はないからこそ、流行の担い手は中流生活者である。

ジョン・A・ウォーカー／サラ・チャップリン著『ヴィジュアル・カルチャー入門』晃洋書房 2006年より

### ジンメル

きらきら煌くものを身につける人は、放射の中心となり、身体的な境界を越えて自己を拡張させ、他人の眼ざしを惹き寄せることができるようになる。

### キャリー・アズマン

宝石は外部の光源から届いてくる光線を捉え、それを再び送り返す。この反射された光線は、宝石を身につけている人を違う視点から眺める人間の眼を捉え、その反射的な眼差しを通じて、再びその間接的な起源(=宝石)へと送り返される。



左上 明治11年 月岡芳年「見立て多以儘」 大判 日本クラフト学院蔵

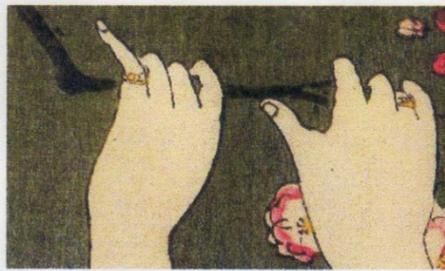
右上 明治23年 豊原国周「見立春夜二十四時 午後七時」大判 町田国立版画美術館蔵

下 明治30年 楊州周延「真美人 十四」大判 町田国立版画美術館蔵 (撮影・鈴木)



孤児院(鏑木清方)

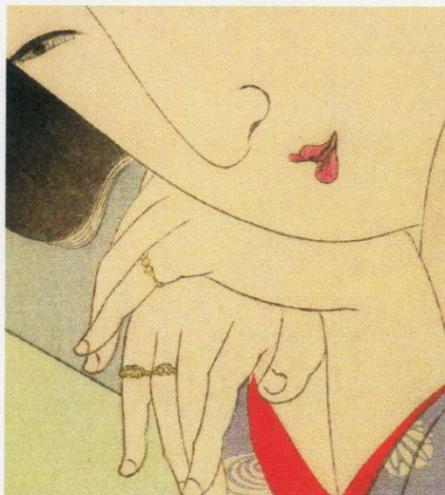
女学生は左右の手に指輪 机のしたの下女の指輪は地金



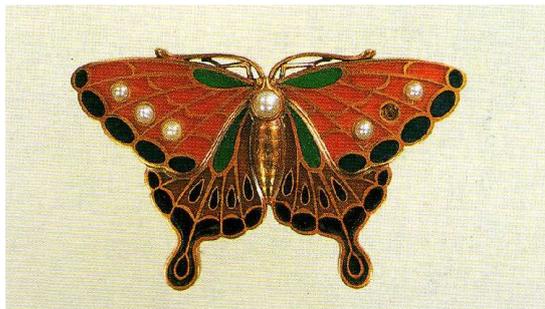
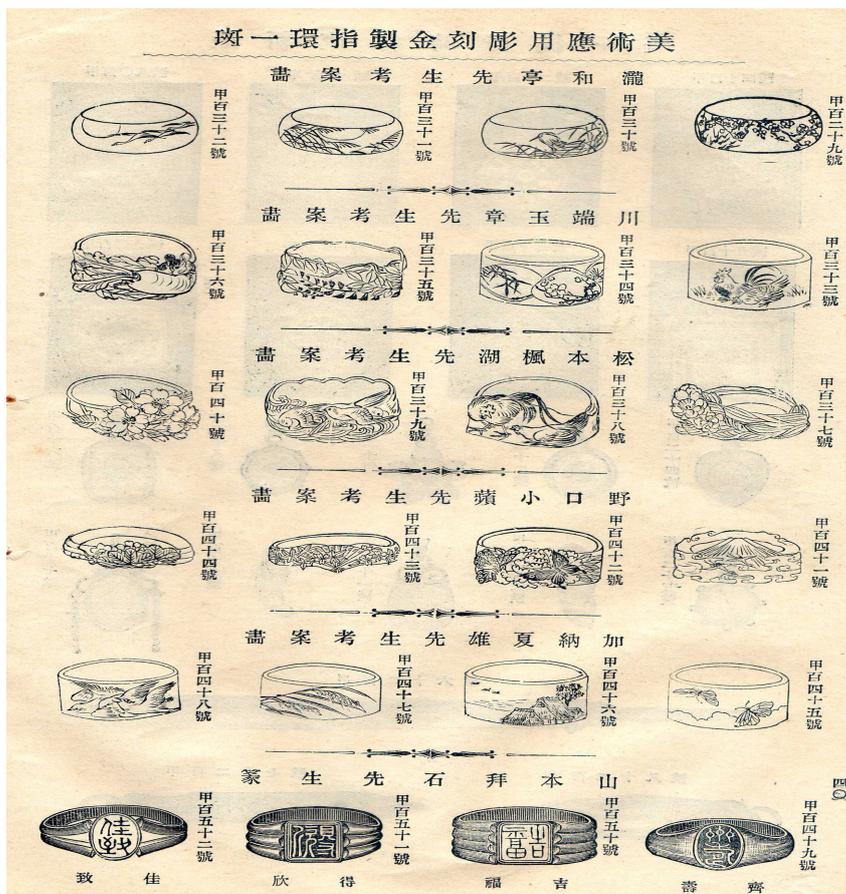
「いま姿 一枝」 部分 左右の



「いま姿 おてつだい」 左手指輪



「いま姿 えまきもの」 部分 両手・指輪



1893年（明治26）シカゴ万国博覧会出品の沓谷滝次郎の作品。  
 沓谷滝次郎は「梅屋」を屋号とする上野池の端の装身具・小間物商。  
 東京国立博物館蔵。『ジュエリーの歩み100年』  
 （美術出版社・2005年刊行）ではブローチと表示。  
 『装身具の歩み』（日本ジュエリーデザイナー協会・2000年）では  
 襟留と表示。